

東洋体育授業に関する研究（その2）

——「東洋体育授業」の位置づけと「点検・評価」問題の再考の視点から——

森 正 明

要 約

本研究では、「東洋体育授業」の位置づけと「点検・評価」問題の再考を試みた。

「東洋体育授業」は、大綱化以後の大学体育に対して「学びのスタイルを変える」という点で、大きな影響を与えてきたことが明らかになった。これまでの、技術向上のために指導を受けるというスタイルから、創意・工夫や自らのからだとのコミュニケーションをはかる授業内容が取り入れられてきている。

「からだ育て・からだ気づき」をテーマとする授業のひろがりには、新学習指導要領の「心と体を一体として捉え」た「体ほぐし運動」につながったと考えられる。

「自己点検・自己評価」問題では、個人としての取り組みのひろがりは見られるものの、大学全体としての取り組みはまだ不十分であるといえる。

そこで、授業における「点検・評価」のモデル図を提示して、具体的な取り組み方法について問題提起した。組織体としての大学は、構成員である教員、職員、学生の点検・評価に基づいて変容していくものであると考えられる。その意味で、教育評価である「授業評価」への積極的な取り組みが行われ、評価結果を分析して次の授業に役立てるといふ「循環」が、授業効果をあげる有効な方法のひとつであることが明らかとなった。

は じ め に

1999年度の紀要では、新設種目の「東洋体育授業」を対象に1.受講理由、2.授業評価についての調査を実施し、その結果の検討を行った。その検討結果から、「東洋体育授業」は「レクリエーション型スポーツ」とも異なるニーズがあり、「自己表現欲求」を求めて履修しているのではないかということが、考察された。

これら「レクリエーション型スポーツ」や「東洋体育授業」は、大学設置基準の大綱化（以下、大綱化）以後、各大学で広がりを見せ開設された経緯がある。この経緯をふまえると、大綱化以後の「東洋体育授業」関連の教育・研究両面の取り組みについての検討が再度必要になっ

た。その理由のひとつとしては、新学習指導要領の体操領域が「体づくり運動」に改称され、新たに「心と体を一体として捉え」た「体ほぐし運動」が今日位置づいたからである¹⁾。

また、大綱化以後の重要な柱の一つに「自己点検・自己評価」の問題がある。この点についても、教育実践研究に対して先駆的な役割を果たしてきた大学教育学会の取り組みについて再度検討する必要がある。この「点検・評価」の問題は、授業研究の立場から極めて重要なテーマであり、これまで継続してきた研究テーマの根幹を貫いていた領域でもあるからである。

目 的

本研究では、大綱化以後の「東洋体育授業」の教育・研究両面にわたる取り組みについての再考と、「点検・評価」問題を対象に実践研究を行ってきた大学教育学会の取り組みについての検討を行う。そして、大学体育における「東洋体育授業」の位置づけを明らかにし、授業分析につながる試案を提示する。

「東洋体育授業」の位置づけ

(大綱化以後の日本体育学会報告を中心にして)

1991年の大綱化以来、10年が経過した。この10年間全国の大学はいわゆる大学改革のながれの中で教養と専門の一貫性を追求し、さまざまな試みを行ってきた。授業に関する改革は、カリキュラムの改革を中心にそれぞれの領域がパラダイム転換といえる提示を始めた。

体育の領域では、それまでの保健体育という枠組みの改組と連動するかたちで「体育」か「スポーツ」かという名称問題に議論が集中した。大綱化以後の傾向としては、「健康」、「スポーツ(科学)」や「健康科学」という名称が多く用いられているが、本質論という点ではいまだ議論は不十分のままである²⁾。

このような状況の中で、大綱化以後大きく変わってきた一つが開設種目であった。戦後開設された大学体育は、その多くがスポーツ種目を中心にした形態で実施されてきた。この傾向に再考をうながすかたちで、ファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)^{註1)}の取り組みが始まった。たとえば「スポーツ文化をテーマにバレーボールのルールの変遷を体験する実習」³⁾や、「ニュースポーツを教材とした授業」、「演習形態の授業」も開設された⁴⁾⁵⁾。「東洋体育授業」もこのような背景の中で、それまで開設されていた「武道種目」の概念とは違う要素をもって登場した。1991年の42回大会で、「中国武術の伝承と分類(その1)」が報告され、

1992年の43回大会では、「大学体育ボディワークの展開〈2〉—「ふれる」ということ—」が報告されている⁶⁾⁷⁾。

大綱化以後の開設形態の多様化の中で、「こころとからだ」をテーマにした授業の必要性が高まってきた。この「こころとからだ」をテーマにしているという点で、「ボディワーク」や「東洋体育」は共通点をもっている。この傾向がその後の「からだ気づき」や「からだほぐし」につながっていった。このような経緯によって、「こころとからだを一体として捉えた、からだほぐし運動」、「内面性を喚起する体育」という概念で、これらの領域は大学体育の教材として取り入れられるようになったといえる。

表1 「東洋体育授業」関連領域の先行研究（日本体育学会）

領域名 年次	ボディワーク (Body Work)	東洋体育	からだづくり・ からだ育て	からだの気づき→ からだほぐし (Body Awareness)
46回 (1995)	「ボディワークに伴う生理心理的变化について」 —脳波、心拍数、呼吸数を中心に— (体育心理学)	「気功訓練による心理的、生理的な変化の一考察」 (保健)	『ドイツの「身体の経験としてのスポーツ授業」の検討を通してみた日本の「からだづくり」の問題点』 (体育科教育学)	
47回 (1996)		「舞」と「武」の人類学 —中国舞踊における剣の表現— (スポーツ人類学シンポジウムⅡ)		「からだの気づき」の学習内容 — Body Awareness の実践— (体育科教育学)
48回 (1997)			『人間の「からだ」や「からだの動き」をどのように仕向けようとしているのか?』 —「身体」「身体運動」概念の再考— 「からだ気づき」の学習内容(2) — Body Awareness の実践— 「からだの気づき」を促す教材 「からだ気づき・からだ育て」の実践と検討(2) (学会本部企画シンポジウム)	
				「21世紀における体育専門家に共通な身体形成へのアイデンティティを探る」

49回 (1997)			<p>「身体形成のための技術のボディ・ウェアネス（からだ気づき）の立場から（学会本部企画シンポジウム） 「からだ気づき」の学習内容(3) —授業デザインの視点— 「からだ気づき・からだ育て」実践の授業分析の試み —実践の「特殊性」に応える分析方法を求めて— 中学校における「からだ気づき」の授業実践 —陸上競技の単元の中で—</p>
50回 (1999)			<p>「自然な有機的な魂のこもった動きの教育」としての体操の立場から 「体づくり運動」における主体的問題解決の育成</p> <p>授業者の行動から見る「からだ気づき」の特徴 「Feldenkrais Method（フェルデンクライス・メソッド）の体育科教育における可能性 ～ATMと「体ほぐし」～</p>
51回 (2000)			<p>『「体ほぐし」について—その教育的意義、可能性、問題点を問い直す』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「体ほぐしの運動」の導入とその可能性 ～「体ほぐしの運動」が投げかけるもの、ダンス教育の立場から 2. 「体ほぐし」は、今までの体育を変えられるか 「目標—評価」システムを「からだ気づき」実践から問う 3. 「体ほぐし」の受け止め方とこれからの「動きの教育」 ～体操研究者の立場から～ 4. 子どものこころとからだを耕す体育の授業と「体ほぐし」^{註2)}

表1は、1995年の46回大会以後の関連領域の一覧表である。この表からは、ここ5年間学会の大会本部が、「からだ気づき」「からだ育て」問題に積極的に取り組んできたことが明らかであり、大綱化以前のスポーツ種目中心の傾向とは明らかに異なる授業実践が広がりをみせているといえる。そして中学校においても、陸上競技の單元の中に「からだ気づき」を取り入れた授業実践の報告が行われている。今後、こうした領域の小学校、中学校、高校への広がりは、ますます大きくなっていくと思われる⁸⁻²⁵⁾。

「からだ気づき」や「からだ育て」の身体技法として捉えられている「ボディワーク」は、欧米の身体技法のみならず東洋のヨーガや鍼灸にいたるまで約300種を超えるといわれている²⁶⁾。こうしたことから、本学の「東洋体育授業」で開設している「空手・ヨーガ、太極拳、中国武術、東洋ウエルネス」等も、「ボディワーク」のひとつであると規定してよいと考えられるが、今後さらに検討すべき課題でもある。この課題のひとつとして、「東洋体育授業」の研究成果を学会報告や研究機関誌へ投稿していく必要があるし、「東洋体育」と「ボディワーク」等との関連を再考している本研究の意義もあるといえる。

「点検・評価」問題に関する先行研究からの問題提起

(大学教育学会を中心にして)

大綱化以後、努力義務として制度化された「点検・評価」は、大学改革の大きな柱として考えられてきてはいるが、公開性という点でまだ多くの困難があり十分な議論が行われていない状況にある²⁷⁾。この問題については、大綱化以前から取り組んできた大学教育学会からの問題提起を中心に考察する。大学教育学会は、1年に1回の学会大会と1回の課題研究集会を開催している。大綱化以後「点検・評価」問題を中心に取り組み、1995年頃からFD問題にも積極的に取り組んでいる。ここ数年は、「授業開発」や「教授法」の問題など、学生の授業効果をあげるためのさまざまなテーマを、具体的な事例を提示して研究報告している表2²⁸⁻³⁵⁾。

この学会が果たしてきた大きな役割のひとつが、「授業」を研究対象として捉え、さまざまな事例研究を継続してきたことにある。大綱化によって、大学は「教育・研究機関」として位置づけられた。それまでの研究・教育機関からの衣替えともいえる。特に、「点検・評価」の問題は、それまで全くといってよいほど公開することのなかった大学の授業効果に対する警鐘でもあったといえる。関は、『教育面での日本の大学は、「外に開かれた」制度を有していないだけでなく、「内に開かれた」制度さえも整備できていない。大学教育は「密室的な営み」に類する大学の講義の集合体の域にとどまっているとする批判を否定し難い状況にある。』と指

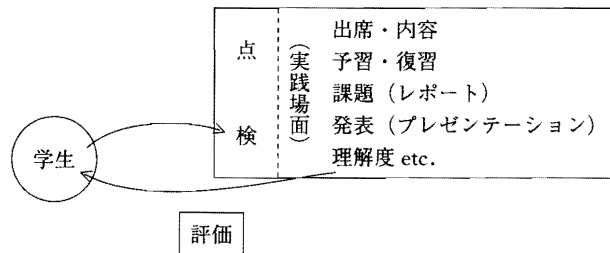
摘している。この時期から、大学における教育面においても Plan（目標設定・計画）→Do（実施）→See（評価）→次のPlan という一連の循環過程に沿って運営を行う必要性が議論され始めた³⁶⁾。

こうして「点検・評価」の問題も少しずつ取り組みが始められ10年を経過したが、まだ個人レベルの点検・評価が中心であり、大学全体の点検・評価を公表している事例は極めて少数である。今後は、国公立大学の独立行政法人化の問題とも連動して努力義務以上の取り組みが期待され、その公表結果に注目が集まっていく傾向にある。そして、こうしたながれば、私立大学も含め日本の大学が取り組まなければならない大きな課題となっていくと考えられる。

授業における自己点検・自己評価のモデル

図1は、授業における自己点検・自己評価のモデルを学生（サイド）と教員（サイド）から

1. 学生（サイド）〈学生自身の点検・評価〉



※点検項目をチェックして、点検結果をフィードバック（評価）する。

2. 教員（サイド）

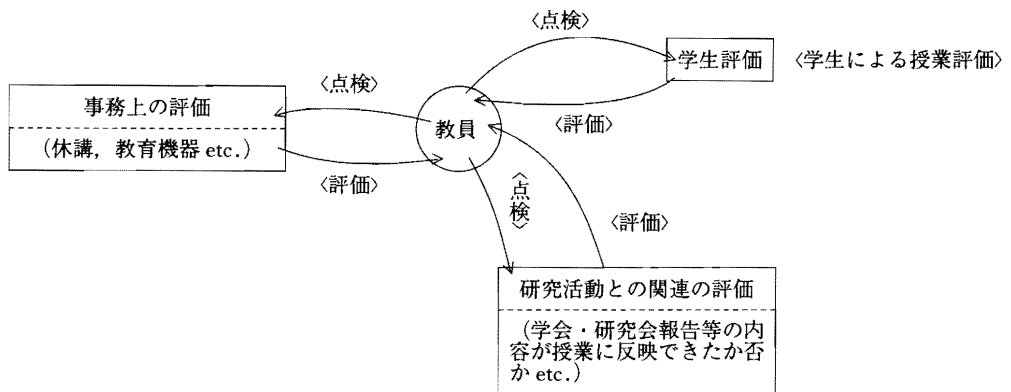


図-1 授業における自己点検・自己評価のモデル

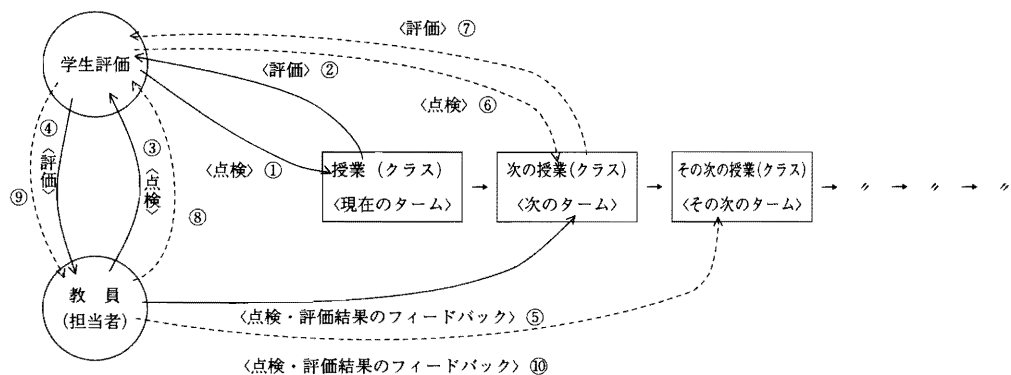
検討した図である。大学における点検・評価は、教員を対象に教育面、研究面に対して集中している傾向がある。しかし、大学は教員、職員、学生で構成されている組織でもある。組織体としての大学の中で、教員の点検・評価や各部署の機能チェックを含む職員の点検・評価も重要である。さらに、学生自身に自己点検・自己評価させることも必要である。具体的には、授業に関するレポートに項目をおいて実施する。筆者は、講義形式の授業では、最終週にできる限り「学生自身の点検・評価」を実施している。図1-1に示した項目等について、自己点検・自己評価する時間をとっている。評価という用語に、即点数をイメージしてしまうので作成時間内に終わらない学生もいる。期日を決めて提出させているが、1年次生には大変な課題となっているようである。授業内容の振り返りという点では、ノートの有効活用やレポート作成の積極性が見られる学生の評価が高い傾向である。この学生自身の点検・評価も教員の個人レベルでの取り組みにとどまっているので、今後は組織体としての取り組みが必要である。

教員（サイド）の点検・評価としては、授業環境としての教育機器や授業計画と関連する休講の問題等を事務上評価として捉え、学会・研究会等の授業内容への反映を研究活動関連評価とした。これらの点検・評価結果の成果を学生評価というかたちでチェックする。これが、授業における自己点検・自己評価のモデルである。

授業評価（学生評価）「循環」モデル

図2は、授業評価（学生評価）「循環」のモデルである。ここ十数年、点検・評価問題がとりあげられこの問題に対する大学関係者の関心も高まってきた。しかしながら、点検・評価を具体的に実行していくにはどうしたらよいかわからないという意見があることも事実である。

授業は、授業を担当する教員と受講する学生によって成り立っていると規定することができる。この両者の相互作用によって効果があがっていくものであり、どちらか一方からの働きかけだけでは不十分である。筆者は、授業評価は授業効果をあげていくことを目的として、授業を客観的に分析するために行うものであると考えている。しかし自分自身の授業だけに客観的に判断するのが困難なので、それを補うための手段として学生評価を位置づけ役立てていくことは、有効な方法であるといえる^{註6)}。そして、何よりも調査をすることの第1の目的は、調査対象に対して（この場合は、授業および学生）その結果を還元していくことが重要である。調査対象に対して還元するということは、さまざまな質を高めた内容を提示することにつながるからである。



※①～⑩の数字は、順序を表す。授業は、タームごとに、点検・評価され変容していく。

図-2 授業評価（学生評価）「循環」モデル

この図に示した①～⑩は、順序である。現在の授業を受講している学生が点検・評価する。その結果について、担当者である教員が点検・評価する。そして、こうした点検・評価結果を分析して、授業および学生に対して新たな提示を行う。（フィードバックするといいかえても良い）ここでのキーワードは、「循環」である。学生評価を通して、より質を高めていく良い循環システムが必要である。もちろん図1で示した、事務上の評価や研究活動との関連の評価もこの循環システムに組み入れて、成果をあげていくことは可能である。

ま と め

「東洋体育授業」関連領域について、先行研究からの再検討を行った結果、「東洋体育授業」関連領域は、大綱化以後の大学体育の学びのスタイルを変えるという点で、大きな役割を果たしてきたといえる。技術の向上のための指導を受けるというようなスタイルから、「からだ気づき・からだ育て」というテーマで、自らが気づき、自らが創意・工夫するという能動的な授業が展開されてきている傾向がある。この傾向は、新学習指導要領の「体ほぐし運動」との関連で、今後は小学校、中学校、高校の体育授業にも現れてくると考えられる。

「東洋体育授業」と「ボディワーク」との関連では、身体技法のひとつとして共通点をもっていると考えられる。ある意味では、身体技法に国境はない。現代社会は、西洋だの東洋だのという時代ではなくなっているということである。このことは、体育授業の履修者だけではなく、オリンピック選手に代表されるトップアスリートまでが高い関心を示し、トレーニン

グにも取り入れているからである。メンタルトレーニングがその代表であるが、最近ではヨーガ等の身体技法を取り入れたトレーニングを実施している選手も多数でてきている。

WHO（世界保健機関）が、健康の定義に新たな解釈を加えた。これまでのPhysical（身体的な）、Mental（精神的な）、Social（社会的な）にプラスSpiritual（霊的な、魂の）を加えたのである。加盟国全体の批准が終了していない段階ではあるが、これまでのメンタルという要素では捉えきれない内面からの要素が加味されたといえるのではないだろうか。上述した、西洋や東洋という区分では捉えきれないグローバル化がすすんでいるともいえる。

現代は洋の東西を問わず、「心身一如」「自己表現」「からだとのコミュニケーション」というようなテーマが求められているということである。これは、人間が生来持っている本質を見直すことでもある。その意味ではこのような傾向を、現代社会における「温故知新」と捉えることもできるのではないだろうか。

もうひとつの検討課題である「点検・評価」問題については、大学という組織体での取り組みがすすんでいない事があらためて明らかとなった。しかしながら、大学教育学会等の取り組みでは、教育（特に授業）領域を対象にした研究が積極的に行なわれている。FD活動を通じた点検・評価結果報告であるといえる。組織体としての点検・評価も、個々の取り組みの集合体であることを考えれば、これまで以上により多くの関心をもつ教員が増え点検・評価に関われば全体の点検・評価も実現できることになる。大学教育の「密室的な営み」をいかに打破できるかという課題であるともいえる。

こうした課題への具体的な取り組み方のモデルとして、図1と図2を提示した。今回の継続研究テーマである「東洋体育授業」も、この循環システムで点検・評価していく必要がある。そのことによって、よりよい授業が展開され授業効果があがっていく好循環を生むことにつながるからである。

今後の具体的な課題としては、継続研究テーマである「東洋体育授業」の担当者による自己点検・自己評価を行い、これまで取り組んできた成果の質をより高めていきたい。

今回の論文をまとめるに際して、宮本研究員をはじめ「東洋体育授業」担当の先生方にご協力願った。紙面をかりてお礼申し上げたい。

文 献

- 1) 原田奈々子「こころとからだをほぐすボディワーク」、日本女子体育連盟編集、2000年4月号、54-58
- 2) 松岡信之「保健体育教育の改革からみた大学教育」の報告、一般教育学会誌第17巻1995年5月、109-110
- 3) 丸山真司「大学体育におけるバレーボールの「歴史追体験学習」の試み」大学体育の展開—授業実践・シラバス—、社団法人全国大学体育連合、1995、30-37

- 4) 師岡文男,「生涯スポーツコース(フライングディスク・野外活動他)」,社団法人全国大学体育連合, 1995,80
- 5) 大神賢一「学習ノート」を用いた水泳の授業,社団法人全国大学体育連合, 1995,52-56
- 6) 佐藤 仁「中国武術の伝承と分類(その1)」1991,第42回日本体育学会口頭発表(富山大学)
- 7) 津田忠雄「大学体育におけるボディワークの展開〈2〉—「ふれる」ということ—,1992,第43回日本体育学会口頭発表(大妻女子大学)
- 8) 宮崎英子「ボディワークに伴う生理心理的变化について—特に脳波・心拍数・呼吸数を中心として—,1995,第46回日本体育学会口頭発表(群馬県民会館)
- 9) 小川鮎子「気功法訓練による心理的,生理的な変化の一考察」,1995,第45回日本体育学会口頭発表(群馬県民会館)
- 10) 近藤智靖『ドイツの「身体の経験としてのスポーツ授業」の検討を通して日本の「からだづくり」の問題点』,1995,第46回日本体育学会口頭発表(群馬県民会館)
- 11) 鈴木恵子「舞」と「武」の人類学—中国舞踊における剣の表現—,1996,第47回日本体育学会—スポーツ人類学シンポジウム2—(千葉大学)
- 12) 高橋和子「からだの気づき」の学習内容—Body Awareness 実践を通して—1996,第47回日本体育学会口頭発表(千葉大学)
- 13) 山本徳郎,人間の「からだ」や「からだの動き」をどのように仕向けようとしているのか?—「身体」「身体運動」概念の再考—,1997,第48回日本体育学会本部企画(新潟大学)
- 14) 高橋和子「からだの気づき」の学習内容(2)—Body Awareness 実践を通して—1997,第48回日本体育学会口頭発表(新潟大学)
- 15) 鈴木 学「からだの気づきを促す教材—「卵は立つ?」の実習が保証する経験の可能性—,1997,第48回日本体育学会口頭発表(新潟大学)
- 16) 原田奈々子「からだ」の教育を視点にもつ体育—「からだ気づき・からだ育て」の実践と検討(2)—,1997,第48回日本体育学会口頭発表(新潟大学)
- 17) 高橋和子,21世紀における体育専門家に共通な身体形成へのアイデンティティを探る「身体形成のための技術—ボディ・アウェアネス(からだ気づき)の立場から—」
- 18) 高橋和子「からだ気づき」の学習内容(3)—授業デザインの視点—,1998,第49回日本体育学会口頭発表(愛媛大学)
- 19) 原田奈々子「からだ気づき・からだ育て」実践の授業分析の試み—実践の「特殊性」に応える分析方法を求めて—,1998,第49回日本体育学会口頭発表(愛媛大学)
- 20) 足立美和,中学校における「からだ気づき」の授業実践—陸上競技の単元の中で—,1998,第49回日本体育学会口頭発表(愛媛大学)
- 21) 滝沢かほる,こころとからだ「自然な有機的な魂のこもった動きの教育」としての体操の立場から,1999,第50回日本体育学会口頭発表(東京大学)
- 22) 鈴木和弘他「体づくり運動」における主体的問題解決能力の育成,1999,第50回日本体育学会口頭発表,(東京大学)
- 23) 梅津健一,授業者の行動から見る「からだ気づき」の特徴,1999,第50回日本体育学会口頭発表(東京大学)
- 24) 高尾明子,Feldenkrais Method(フェルデンクライス・メソッド)の体育科教育における可能性—ATMと「体ほぐし」~,1999,第50回日本体育学会口頭発表(東京大学)
- 25) 体育科教育学シンポジウム,「体ほぐし」について—その教育的意義・可能性・問題点を問い直す
- 26) 原田奈々子,前掲書1),54

- 27) 森 正明「中央大学における自己点検・自己評価の現状と課題—鳴門教育大学を視察して—」, 2000, 中央大学保健体育研究所紀要, 111-120
- 28) 安岡高志他, 大学の自己評価に関する各大学の取り組み状況—本学会会員アンケート調査—, 1992, 一般教育学会誌第14巻 第1号 (通巻25号), 37-42
- 29) 原 一雄, 教師自身による自己診断, 一般教育学会誌第14巻 第2号 (通巻26号), 25-27
- 30) 林 義樹, 学生による授業評価の陥穽—三角授業と『感想ラベル』の実践をふまえて—1992, 一般教育学会誌第14巻 第2号 (通巻26号), 34-40
- 31) 大槻 博, 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察, 1993, 一般教育学会誌第15巻 第2号 (通巻28号), 47-49
- 32) 逸見勝亮, 日本の教育システムの問題点—大学教育が果たしている, 果たしていないでいる役割—「教師教育の立場から」, 第18回一般教育学会シンポジウム報告, (札幌大学), 1996
- 33) 安岡高志, 教員評価の評価項目について, 大学教育学会第20回大会自由研究報告, (ICU), 1998
- 34) 梅本勝博他, 大学教育における総合的学習の必要性—知識創造の視点から—, 2000, 大学教育学会誌第22巻 第2号 (通巻第42号), 69-73
- 35) 林 義樹, 我が国の高等教育機関における『参画教育』の現状と展望—特に学部授業の「参画化」をインターネットで探る—, 大学教育学会第22回大会自由研究報告, (千葉大学), 2000
- 36) 関 正夫, 「大学の自己評価に関する今後の課題—総合評価システムの理論的枠組みの検討—」, 1992, 一般教育学会誌第14巻 第1号 (通巻25号), 43-56

註

- 註1) FDは, 授業資質の向上のための取り組みと考えられている。「点検・評価」は授業資質を向上させるための方法論(手段と言ひ換えてもよい)として活用されている。その意味で, 授業評価においては, 「学生評価」が必要不可欠であるといえる。
- 註2) 4名の演者の中で, 唯一の小学校教諭である堤吉郎(愛知県扶桑町立扶桑小学校)は, こどものこころとからだを耕す体育の授業と「体ほぐし」というテーマで, 新学習指導要領ができる以前からの実践授業内容を報告した。今回の改訂では, 学びのスタイルを変える(指導を受けて技術をのびしたり体力を向上するだけではなく, 自らのからだに体する気づきや自らが創意・工夫する体育)ということがキーワードである。今後多くのスポーツ教材に良い影響を与えていくことを強調。
*新指導要領は, 「体ほぐし」のからだを漢字で表記している。大学の授業等では「からだほぐし」と使われることが多い。これは, ボディワークの「ボディ」が, 語の成立から, 通常の「体」ではなく「からだ(私)」の意味としていることによる。原田奈々子, 前掲書, 57
- 註3) 寺崎昌男は, 授業が研究という分野は教育学研究のひとつの原点になっていて専門誌も発行されている。「研究授業」という慣行も小中高校では一般化している。
「研究講義」や「サンプル授業」といえば大学では抵抗を受けるだろうが, そこまで必要な時代になったのではないかと指摘している。
- 註4) 金城学院大学の事例から大学の授業研究では, 授業記録の方法の開発が必要なことや記録がなければ緻密な授業研究は不可能であることを強調している。
- 註5) 林は「参画化」の授業の中で, 匿名性を極力廃して授業展開していることを報告した。授業で発言する際に, 必ず学部, 学科, 学年, フルネームをいわせるようにしている。100名~200名規模の授業での事例である。どこの, 誰であるかわからない関係では, 相互の理解は生まれにくいからである。発表後の討議の中で, 「授業効果が期待できる授業の雰囲気とはどのような状態か?」という質問に対して, 「夢中になって我を忘れて没頭している状態です。」と答えていた。ここでの「参画型」の授

業目標も、運営を含む能力開発を目指している。（林 義樹）

註6）FDの原理と方法について、自己点検・自己評価の上に立った自己研鑽をふまえながらも、他者による評価を歓迎しそれを参考にしながら、さらに研鑽を重ねることであると指摘している。（越前喜六）

アメリカのある大学では、大学院生に「大学教授法」の履修を常に呼びかけているところもある。「大学教授学」は教育学者のものではなく、一般の大学教員の少なくとも副専門として位置づけられる必要があると、教育面の充実を問題提起している。（絹川正吉）筆者の「授業研究班」もこの絹川の主張と同様のコンセプトで研究に取り組んでいる。授業を研究対象として捉えるスタンスは、大学教員には必須の条件であると考えている。